



● 《MY MY SWEDEN》(2011)

「初めて版画をやっただけでピンときて、自分の表現に合っていると感じた。本当は3年から版画に移ることができたけど、決断できずにいて洋画コースで過ごし、次の年にもう一度1年生をやり、版画で作品を作っていく決意をした。」と板垣さんは話す。版画に出会ってから、自信を持ち制作をすることができるようになったそうだ。

布・半立体の表現

板垣さんの作品の特徴は、布にシルクスクリーンでプリントし、縫い合わせ、綿を詰めた半立体の作品であることだ。私も大学時代に服飾を勉強していたので、布での表現には興味があった。縫うという表現方法には女性的だと感じることはないだろうか。現代アーティストの中でも縫うという表現で作品制作をしているアーティストはいる。必ずしも女性ではないが、そのような意識をしたことがあるか伺った。

「いつも作品を作っていて目指すものは、人が考えないようなことを考えるということ。

絵の中に人間も登場するようになった。これには、人間を加えることで具体的に自分の身の回りにあることのように感じてほしい想いが込められているそうだ。

お話を伺うと、「今だから分かることだけど」と子供の頃の教育にも影響があったと話してくれた。彼女は、アイヌ民族の教育方針を受け継ぐ保育園に通っていた。そこでは、動物や植物には精霊(魂)があり、それらに支えられて人間は生きているというアイヌ民族文化を教えられたそうだ。その他にも工作やお絵かき、刺繍などの保育園での経験が今の彼女の表現のルーツとなっている。

スウェーデンでの留学経験

大学院に進学して1年目の8月から8か月間、スウェーデン王立美術学校に留学していた。「筑波大に入学して学群で5年間過ごして、6年目の夏にスウェーデンに留学した。筑波での生活が日常的になり過ぎて、ある意味新鮮さを失っていた頃だった。新しいものを作ることが難しくなった頃でもあった。スウェーデンに行くと、環境から変化し制作意欲が湧いた。毎日景色を見ても、毎日同じ道を歩いて学校に行っても様々な発見があった。」

続けて思い出も話してくれた。「留学を始めて2週間ほどは、友人の住んでいる島に滞在した。スウェーデンには、海も、湖も、島もたくさんある。周りは自然豊かで、建物は人形の家のようにかわいらしいものが並んで

● 二人展 in Kungle.Konst högskolan(2011)



いた。一番おいしかった食べ物は、朝ご飯。朝からフルーツを食べて、ヨーグルトの種類もたくさんあった。」

留学の最後には、一緒に留学した日本人と二人で作品展示を行なった。会場を斜めに分けて、スウェーデンで制作したものだけで展示をしたそうだ。「作品は、時間が限られている中で全く新しいことをやっても完成度は上がらないと感じたので、日本と同じく版画や立体をベースに作っていた。自分が今までやってきたこと、技術も活かして、なおかつ最初の海外生活の思い出が詰まったものを作りたいかった。」留学先の学校の授業は専攻が分かれていなかったため、自由に受けることができたが、授業よりも制作に時間をかけ、スウェーデンの環境や文化の要素を作品に詰め込んだそうだ。

出来上がったものが《MY MY SWEDEN》という本の作品である。ヨーロッパでは、アーティストブックと呼ばれるものが昔からあり、彼女は初めてのアーティストブックを留学期間中に作ることを決めた。また、これらはヨーロッパでは伝統あるストーンリトグラフという技法を用い制作しており、板垣さんも初の試みだったそうだ。額から本を取り出し、スウェーデンテキスタイルと版画を組み合わせた本の表紙を開いてみると、版画にスウェーデンで売っていたペーパーナプキンをカラージュ刷りした、1ページ1ページ思い出の込められた作品となっている。

● 《Face》(2010)



挑戦し続ける想い

MC展(博士前期課程作品展)、修了制作展に向けて、板垣さんの作品に羊毛フェルトが使用されるようになった。近年、日本ではマスコットなどでちょっとしたブームとなった羊毛フェルトだが、彼女の作品の中には絵具のような色彩感覚で綿布の繊維に絡められ、作品に用いられている。異素材である羊毛を使い、写実的な表現を組み入れられることから、カラージュのような感覚でもあるそうだ。また、もう一つ追加されたものとして、作品には椅子が登場し、壁に掛けられた作品から椅子へ繋がっている。これは、作品をインテリアとしても飾ることができ、よ

り身近に感じることを狙いとしているそうだ。「作品は同じことをやってもおもしろいと思わないから、少しずつ変えて挑戦しながら制作している。」板垣さんが作品制作の上で目指すものは、“人が考えないようなことを考える”こと。彼女にとっての美術との向き合い方であり、強い想いを感じる。

大学院修了後は、京都のデザイン事務所に就職が決まっている。就職する会社は、広告やプロダクトなど様々な仕事を扱っていて、新しい挑戦ができる。そんなところも彼女らしいところである。これからの彼女の活躍に期待したい。

● 左図・《Marriage kinoko》(2011)

● 左下図・《危機感を感じる為の椅子》(2012)

● 右下図・《枯山水スペクタクル》(2012)

